

北の譜

聞き手 奥津義弘記者(北海道新聞社)

②<アイヌと老子>

秘密の行事も見せる

札幌から音更に移ったのは、父親が音更村長になったためです。その前は帯広の警察署長をしてましたが、その時は家族を札幌に置いての単身赴任でした。音更村は大正末のそのころ、日本で一番広い村といわれてました。私たちが住んでいたところ、今は役場がたっておりますけど、当時は前が沼で、公園になっている裏の高台が遊び場所でした。

それで、あのころはアイヌ・コタンとってたんですが、開進学校の周りにアイヌの人たちが住んでまして、父親が村長ということで、よくうちに見えてたんですね。「土地をだまし取られた」とか、あれこれ相談を持ち込まれてました。おやじも酒が好きで、立派なひげを生やしていたもんですから「本当に日本人か」って聞くんですね。「いや、いや、シャモ(和人)には惜しい」って。

まあ、そういう出入りがあったものですから、結婚式ってほどでなくても何かこうちょっとあると、僕なんかもおやじの代わりに行くということもあって。音更の人たちは彼らとは全然別の生活をしてたわけですけど、僕だけは一緒によく遊びましたね。

アイヌの友達といくと、パッと鳥がとれたり、魚がとれたりするから仲良くやってて、そうこうする間に向こうも隠さないで、一般のシャモには見せないアイヌの行事を見せてくれるようになったわけです。

作品に大きな影響

こうした付き合いの中で得た者が、後にいろいろな形で作品に影響を与えているようです。自分では特に意識して強く出そうとは考えておりませんが、人さまが私の作品について書くものを見ると、やはり北国の風土とか、アイヌ民族の音楽的影響というのを挙げていますね。

私の「シンフォニア・タプカーラ」(一九五四年作曲)という作品は、彼らへの共感と、ノスタルジアから書いたものです。アイヌの踊りはふつうリムセといい、女の人が踊るのにウポポというのがあります。

タプカーラというのは「立って踊る」といった意味で、自分のその時の心境のようなものを、踊りと詩によって表現する習慣があるんです。動きは多少基本的に決まっていますが、飲んだりして興がのってくると、自発的な動きで踊るわけです。

この「シンフォニア・タプカーラ」は、中学時代から友人の三浦淳史君に献上したもので、アメリカのインディアナポリスで一九五五年に初演されました。このごろは日本でもやられるようになって、レコードはベルギーとかスイス、ブルガリア、アメリカ、イギリスなどで出てます。

ところで音更での生活ではもうひとつ、おやじからよく「老子」の素読をやらされたことも忘れられません。夜、おやじから「おい、お前読んでみな」といわれる。そうすると、二十分か三

十分、白文のやつを声をあげて読むわけです。



▲札幌を離れ音更に向かう直前の伊福部家

後列左が父 利三、前列左端が母 キワ、中央が昭

その間におやじは横になって寝ちゃう。で、立とうとすると「まだ、だめだ」という。おふくろが「もういいから、もういいから」なんていって来て。おやじが出張したり、会合でいない時は、やらずにすむからこっちは大喜びで。

素読をやらされたのは、うちでは僕だけです。僕が五、六年のころ、兄たちは札幌の中学に行ってるし、姉たちは嫁さんにいくという具合で、音更のうちには僕と両親の三人だけでしたから、おやじが話し相手欲しさにしたか、少し暇になったので昔の自分を思い出してやらせようとしたか、どっちかでしょうね。

卒業アルバムに一節

「論語」もやりましたが「これは俗でいかん」というのがおやじの口癖でした。たとえば「老子」では、人の私生活はあまり邪魔しないのが君子の道だと説いているのが、「論語」では「朋(とも)あり、遠方より来たる、また楽しからずや」と出てるわけです。

おやじに無理やりやらされた「老子」ですが、若い時に「バイブル」(聖書)を学んだ方と同じに、考えられないほどの強い影響を受けていると思っております。今でも読みますし、学長をしている東京音楽大学の卒業アルバムには必ず「老子」の一節を書いております。

昭和 60 年 3 月 29 日(金)夕刊

金曜ぷらざ